

くす通信

第155号
2014年1月1日

国立病院機構熊本医療センター 発行

緩和ケアチームより

緩和ケアについて 化学療法センター外来 について



「くす(樟)」の由来について

くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。
また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしぶみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。
本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽にお読み下さい。

外来化学療法時の 診療から治療までの流れをご紹介します



←初回治療や治療計画の変更、再治療の場合は、入院していただき化学療法を行います。



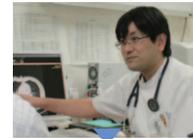
←その後、外来治療に移行することが決定した患者様やご家族には、入院中に化学療法センターの看護師が治療の流れや費用についての事前オリエンテーションを行います。



←治療当日
再来受付機で受付します。



←採血
化学療法センター⑬
or 採血ルーム⑫



←診察・次回予約
各診療科の医師が診察し、化学療法を行うかどうか最終的に決定します。



←治療
治療が決定した患者様は、化学療法センターで治療を受けます。



←会計
総合受付⑤で会計をした後、帰宅となります。

患者様の治療が安全・安楽に行われるためには、患者様・ご家族と医療者との密接な協力が不可欠です。常に不安がつきまとう毎日ではないかと思いますが、医療スタッフ全員でサポートし、応援していきますので、一人で抱え込まずにお気軽にご相談下さい。

13 化学療法センター

をご紹介します

がん化学療法看護認定看護師
矢野真理子



化学療法は、悪性腫瘍に対する手術・放射線治療にらぶ3大治療の1つで、化学療法剤(抗がん剤や分子標的治療薬、ホルモン薬など)を用いた薬物治療です。注射薬や内服薬を使って決められたスケジュールで治療を行うことで効果を発揮しますが、一方で副作用に対する対策も必要となる治療です。

従来は入院で行われていましたが、化学療法時の管理技術が進歩し、外来で安全かつ安心して治療ができる化学療法の種類が増えてきました。外来通院で治療するということは、自宅で普段の生活をしながら、または仕事をしながら、治療を受けることができ、患者様やご家族の生活の質を最大限に尊重できるというメリットを持ちます。外来での化学療法は、化学療法センターで行います。



場 所	4階外来 ⑬化学療法センター
治療時間	平日 08:00~16:45
治療回数	患者さま毎に治療スケジュールが異なります。 1時間以内~6時間、連日、週1回、月1回など様々です。
環 境	ベッド7台、リクライニングシート8台 各々にテレビを設置しています。
♡患者様には、テレビを見たり、休息を取ったりと、リラックスした状態で治療を受けていただくことができます。	
対象疾患	大腸がん、胃がん、肺がん、乳がん、膵臓がん、胆管がん、卵巣がん、子宮がん、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、関節リウマチ等
治療人数	1日平均10名 (ホルモン剤、骨病変治療薬含む)
担当者	各診療科の医師、化学療法センター看護師(がん化学療法看護認定看護師含む)、薬剤師、がん看護専門看護師、臨床検査技師、医事担当など様々な職種スタッフが連携して、治療にあたっています。

国立病院機構熊本医療センター

診療科

- 総合医療センター 総合診療科、血液内科、呼吸器内科、糖尿病・内分泌内科、腎臓内科
- 消化器病センター 消化器内科
- 心臓血管センター 循環器内科、心臓血管外科
- 脳神経センター 脳神経外科、神経内科
- 感覚器センター 眼科、耳鼻いんこう科、皮膚科
- 画像診断・治療センター 放射線科
- 救命救急センター 救急科
- 精神科
- 小児科
- 外科
- 整形外科
- リハビリテーション科
- 泌尿器科
- 産婦人科
- 歯科口腔外科
- 形成外科
- 麻酔科
- 病理診断科

🕒 診療時間 8:30～17:00

🕒 受付時間 8:15～11:00

🕒 休診日 土・日曜日および祝日

急患はいつでも受け付けます

〒860-0008 熊本市中央区二の丸 1-5

TEL 096 (353) 6501 (代表)

FAX 096 (325) 2519

H P <http://www.nho-kumamoto.jp/>

緩和ケアチーム

緩和ケアチームには医師（麻酔科・放射線科・精神科・内科）、看護師（緩和ケア認定看護師・がん看護専門看護師）、薬剤師、理学療法士などさまざまな職種のメンバーがいます。それぞれの得意分野を生かしてがん治療に伴って生じる様々な症状・精神的なつらさへの対応、利用できる社会的制度の紹介、薬剤の使い方の指導などを行っており、各診療科を横断して活動しています。外来でも入院でも対応は可能ですので、担当の先生・病棟看護師や各科外来の看護師に相談いただければ私たちに連絡が取れるようになっていきます。我々が中心になるのではなく、原則各科主治医の先生の診察と並行して診せていただきますのでご安心ください。

緩和ケアチームより

緩和ケア について

血液内科医長 榮 達智



緩和ケアが「がんと診断されたときからいつでも生じ得る不快な身体や心の症状を軽減し、通常の生活により近い暮らしをするための方法」であるという考えは患者さんにも徐々に浸透してきたように思います。

例えば・・・

- ✓ 強い吐き気など抗癌剤治療に伴う副作用の軽減
- ✓ 病気や処置によって生じる様々な症状（呼吸器症状・消化器症状・他）への対処
- ✓ 不安や不眠への対処
- ✓ その時その時に応じた療養環境の見直し

色々な側面から“通常的生活”をサポートできればと考えています。その際いくつかの薬を処方させていただき場面も多くなります。

ただ患者さんと話していてよく思うことがあります。病状や薬の事を誤解して不安なまま生活しているとなつらい症状も出やすいのかなど・・・

私たち医療者が行っていることは簡単なことです。症状をお聞きしたのち診察・検査で病気を診断し、処置をしたり薬を使ったりします。数日後もう一度診せていただいて症状が少しでも良くなったか確認した上で薬の微調整をします。要するに、**適切に薬を処方することは私たちの重要な役割になります。**



それでは処方を受けた患者さんの役割は何かでしょうか？

- ✓ どの症状に対して処方されたかを十分に理解し、
 - ✓ その症状が軽くなっているか、副作用がつかないか、
- 副反応がつかないか、を考え、私達に教えていただく事です。



次に、誤解されやすい薬剤の代表として、モルヒネ（医療用麻薬）とステロイド（ホルモン剤）について書きたいと思います。

モルヒネは飲みたくないと思われる方もいらっしゃいますが、現在は痛み止めとして使い方は確立されています。また呼吸困難に対して使うこともありますし、咳止めとして使うこともあります。副作用としては便秘と内服開始後数日の眠気・吐き気などがありますが、多くの場合対処可能です。ステロイドは体内にも存在するホルモンですが、痛み止めとして、食欲不振に対して、倦怠感に対して、皮膚の症状に対して、呼吸困難に対してなど様々な使い方があります。一人の患者さんに複数の効果を期待して使用する場面も少なくありません。ステロイドを単なる痛み止めとして認識していれば、実は食欲不振に対しては効果があるのに痛みが改善しないから止めてしまったり、もったいないことにもなりかねません。

それぞれの症状はもしかすると完全には取れないということもあるかもしれません。でもそれぞれの辛さが少しずつでも緩和できれば生活のしやすさは増します。十分に話し合い、療養も行いながら、“通常的生活”を実現していただきたいと思います。

